

Rec'd PCT 11 JAN 2005

PCT/JP 03/08718

104520929

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

09.07.03

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

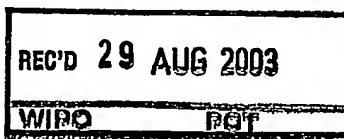
This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application: 2002年 7月19日

出願番号
Application Number: 特願2002-210658

[ST. 10/C]: [JP 2002-210658]

出願人
Applicant(s): ソニー株式会社

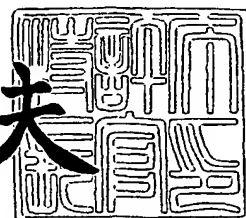


PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2003年 8月14日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 0290299202

【提出日】 平成14年 7月19日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 G11C 11/413

【発明者】

 【住所又は居所】 東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号 ソニー株式会社
 内

 【氏名】 大野 裕子

【発明者】

 【住所又は居所】 神奈川県横浜市保土ヶ谷区神戸町 1 3 4 番地 ソニー・
 エルエスアイ・デザイン株式会社内

 【氏名】 多田 浩二

【特許出願人】

 【識別番号】 000002185

 【氏名又は名称】 ソニー株式会社

【代理人】

 【識別番号】 100086841

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 脇 篤夫

【代理人】

 【識別番号】 100114122

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 鈴木 伸夫

【手数料の表示】

 【予納台帳番号】 014650

 【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

 【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9710074

【包括委任状番号】 0007553

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 同期信号検出装置、同期信号検出方法

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 所定のフォーマットに従ってフレーム単位により形成される信号を入力し、上記フレーム内に挿入される同期信号を検出する同期信号検出手段と、

上記同期信号検出手段が、所定の検出期間内に同期信号を検出できなかったときに、該同期信号検出手段により検出されていた同期信号の検出タイミングに応じて生成した同期信号を再生用同期信号として内挿する内挿手段と、

上記内挿手段による同期信号の内挿が開始された後における所定の条件下で、上記同期信号検出手段により連続して検出される同期信号が正常なタイミングであるか否かについての判定を行う判定手段と、

上記判定手段の判定結果に応じて、上記同期信号検出手段により検出される同期信号を再生用同期信号として出力する再同期手段と、

を備えることを特徴とする同期信号検出装置。

【請求項 2】 上記判定手段は、

上記同期信号検出手段により連続して検出される同期信号についての検出タイミングの間隔を測定すると共に、この検出タイミングの間隔が、入力信号のフォーマットに基づく所定の間隔と所定回数以上連続して一致するか否かを判別することにより、上記各同期信号が正常なタイミングであるか否かについての判定を行うように構成されている、

ことを特徴とする請求項 1 に記載の同期信号検出装置。

【請求項 3】 所定のフォーマットに従ってフレーム単位により形成される信号を入力し、上記フレーム内に挿入される同期信号を検出する同期信号検出手順と、

上記同期信号検出手順により、所定の検出期間内に同期信号を検出できなかったときに、該同期信号検出手順により検出されていた同期信号の検出タイミングに応じて生成した同期信号を再生用同期信号として内挿する内挿手順と、

上記内挿手順による同期信号の内挿が開始された後における所定の条件下で、上記同期信号検出手順により連続して検出される同期信号が正常なタイミングであるか否かについての判定を行う判定手順と、

上記判定手順の判定結果に応じて、上記同期信号検出手順により検出される同期信号を再生用同期信号として出力する再同期手段と、

を実行することを特徴とする同期信号検出方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、同期信号検出装置、及びこの同期信号検出装置における同期信号検出方法に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

例えば、CD (Compact disc) やDVD (Digital Versatile Disc) 等の光ディスクには、EFM (Eight to Fourteen Modulation) 変調、又はEFM+変調等の記録符号化変調が施された所定のフォーマットのデジタルデータが記録される。そして、このようなフォーマットでは、デジタルデータを所定のシンクパターンを含んだフレーム単位のシーケンスによってディスクへの記録を行うようにされる。

【0003】

このため、上記光ディスクについての再生を行う装置側では、読み出したデジタルデータに含まれる所定のシンクパターン（フレーム同期信号）を検出する同期検出回路を設けることにより、それぞれのフレームの区分を認識するようにされる。そして、これにより、光ディスクから読み出したデジタルデータを適正に再生することができるようにされる。

【0004】

ここで、上記のような光ディスク再生装置において、装填された光ディスクの読み取り面上に傷や付着物があった場合には、読み出したデジタルデータに含まれるシンクパターンを検出することができなくなることがある。そして、これに

伴っては、各フレームの区分を正しく認識することが困難となり、読み出したデジタルデータを適正に再生できなくなってしまう可能性がある。

【0005】

このような場合、再生装置側では、上記のようなディスク上の傷等によって再生RF信号の振幅レベルが所定値以上得られない状態（所謂デフェクト（DEFECT）状態）を検出するようにされる。そして、このようにデフェクト状態を検出することにより、ディスクからのデータ読み出しが正確に行われ得ない状態にあることを各部に認識させるようにし、これに応じた必要な制御動作を行うようにされている。

【0006】

ところで、光ディスク再生装置においては、上記のようなディスク上の傷等が要因となるデフェクト状態の発生までは至らないまでも、PLL（Phase Locked Loop）の乱れやビット欠けにより、本来のフレームシンクではないデータ部分においてシンクパターンと同一の信号パターンが検出されてしまうことがある。

【0007】

このため、光ディスク再生装置内の同期検出回路では、本来のシンクパターンが現れると予測されるタイミングの前後となる一定期間のみ、シンク検出を行うようにしている。

すなわち、ウィンドウ信号と呼ばれる、本来のシンクパターンが現れると予測されるタイミングに同期した信号を発生するようにし、このウィンドウ内において検出されたシンクパターンのみを正しいフレームシンクとして認識しようとするものである。

そして、これにより、誤検出された擬似的なシンクパターンが再生処理用のシンクとして使用されてしまうことを防止している。

【0008】

また、これと共に光ディスク再生装置においては、上述したデフェクト状態が検出されてフレームシンクが検出できない場合（シンク欠落）や、上記ウィンドウ内にフレームシンクが検出されない場合等に、フレームシンクを補間する（内挿する）保護回路も設けられており、上記同期検出回路と組み合わせて使用され

る。

すなわち、上記のようなシンク欠落やシンクパターンの検出位置がずれた場合、読み出したデータからのフレームシンクを用いることはできないため、適正であると予想されるタイミングでフレームシンクを内挿する（内挿シンク）ようにしたものである。

この動作は、いわゆる前方保護動作と呼ばれる。

【0009】

このような前方保護動作により、一時的なシンクの欠落やずれは保護可能であるが、このような欠落やずれが連続的な場合には、再生用シンク（つまりここでは内挿シンク）とデータ再生用に本来期待されたシンク位置との間に相違が生じてしまっている可能性があり、正常にデータ再生を行えない場合がある。

【0010】

このため、上記保護回路においては、前述したウィンドウ内に検出シンクが現れなかった回数をカウントするようにし、このカウント値がある一定回数（前方保護回数）に達したときに、ウィンドウをオープンしてウィンドウ信号のタイミングを検出シンクのタイミングに同期させるようにしている。

そして、このようなシンクの再同期動作を行うことで、上記内挿シンクのタイミングと実際にディスクに記録されているフレームシンクとの間に生じていたずれを解消することができるようになる。

【0011】

上記説明したような同期検出回路及び保護回路によって得られる動作を、図6のタイミングチャートを用いて説明する。

なお、この図においては、上記保護回路における前方保護回数が、図示するように10回に設定される場合を例として説明する。

まず、この図において、図示する時点t1より以前の期間は、図6(c)に示す信号WINDOWがHとなる期間内に、図6(b)に示す検出シンクが検出されており、この期間は正常なタイミングでフレームシンクが検出されている状態となっている。つまり、信号WINDOWは、Hレベルの期間をウィンドウ期間として設定する、所謂ウィンドウ保護のための信号である。

そして、この状態では、図6（g）に示す再生用シンクが、上記検出シンクのタイミングに同期している状態となる。

【0012】

この状態から、ディスク上の傷等により再生RF信号の振幅レベルが所定値以下となり、図中時点t1において、図6（a）に示す信号DEFECTがHレベルに立ち上がったとする。そして、これと共に、この時点t1以降において図中期間「A」と示したウィンドウ内にシンクが検出されなくなったとする。

すると、これに応じては、このように検出シンクが現れなかったウィンドウの立ち下がりタイミングである時点t2に同期するようにして、図6（e）に示す前方保護カウント値のカウントが開始される。これにより、ウィンドウ内にシンクが検出されなかった回数についてのカウントが開始されるようになる。

また、上記のようにしてウィンドウ内に検出シンクが検出されなくなったことに応じては、上述したようにしてシンクが内挿されるようになり、再生用シンクとしては、図示するようにこの内挿シンクが出力されるようになる。

【0013】

ここで、この時点t2以降の期間において、図のように信号DEFECTがLレベルとなってデフェクト状態を通過したとされた後、図示する時点t3にて再びフレームシンクが検出されるようになったとする。また、この際、このようにして再び検出されたフレームシンクが、デフェクト期間通過後に、図のようにウィンドウ外となるタイミングでもって検出されたとする。

この場合、上記のようにデフェクト状態通過後に再び検出されたシンクは、先に説明した前方保護動作が行われることにより、前方保護回数（前方保護カウント値）が所定回数以上となるまでは再生シンクとしては使用されない。

つまり、この場合、上記前方保護回数として10回が設定されているため、図6（e）に示す前方保護カウント値が「10」となるまでは、図6（d）、図6（g）を参照してわかるように、内挿シンクが使用されることとなる。

【0014】

前方保護カウント値が「10」に達すると、図示するようにカウント値が「10」となった時点の直後の信号WINDOWの立ち上がりタイミングでもって、

図6 (f) に示す信号WINDOW-OPENがHレベルとなる。そして、これに伴い、前方保護カウント値が「10」となった直後のウィンドウがオープンとなり、図示する時点t4において、信号WINDOWが検出シンクに同期するようになる。

これにより、検出シンクがウィンドウ内に検出されるようになり、図6 (g) に示す再生シンクとして、再び検出シンクが使用されるようになる。すなわち、これによりシンクの再同期が完了したこととなる。

【0015】

なお、ここでは図示しなかったが、上記同期検出回路、及び保護回路による実際の動作としては、上記のようにして再検出後のシンクがウィンドウ内に一致せず、前方保護回数を超えてシンクが再同期された後において、いわゆる後方保護動作と呼ばれる動作を加えて行うようにもされている。

すなわち、再同期後の検出シンクがウィンドウ内に検出される回数を上記前方保護動作と同様にカウントし、そのカウント値がある一定値になった時、現在の検出シンクがデータ再生用シンクとして正しい位置であることを確認するものである。そして、これにより、誤った検出シンクが再生用シンクに使用されることを回避するものである。

【0016】

【発明が解決しようとする課題】

このようにして、従来の前方保護動作によっては、上記のようにしてデフェクト状態の解消後に再検出されたフレームシンクがウィンドウ外に検出された場合は、前方保護回数に対応した回数分内挿シンクを内挿することになる。

【0017】

ここで、図6に示した時点t3以降において、デフェクト通過後に再検出されるようになった各フレームシンクとしては、例えばウィンドウ外において検出されるはするものの、これらが正常な間隔で以て検出されているという場合が考えられる。

つまり、このようにしてデフェクト状態の解消後において再検出されるようになった各フレームシンクが、再生用シンクとして適切とされるタイミングで以て

得られている可能性もある。

【0018】

しかしながら、上記説明によれば、従来の前方保護動作によっては、前方保護回数に対応した回数分内挿シンクを内挿するまではシンクの再同期を行わないようにされている。このため、上記のようにして再検出されるようになった各フレームシンクが適正なタイミングで検出されていたとしても、このシンクに直ちに再同期することができないこととなる。

【0019】

従って、この場合は、正確にフレームシンクが検出されていたとしても、シンクが再同期されるまでの間、データ再生用シンクとして本来期待されたシンク位置とは異なった内挿シンクを使用してデータ再生が行なわれてしまうこととなる。

つまり、従来の前方保護動作を行うことによって、かえってデータ読み出しパフォーマンスを低下させてしまう場合がある。

【0020】

【課題を解決するための手段】

そこで、本発明では以上のような問題点に鑑み、同期信号検出装置として以下のように構成することとした。

すなわち、まず、所定のフォーマットに従ってフレーム単位により形成される信号を入力し、上記フレーム内に挿入される同期信号を検出する同期信号検出手段と、上記同期信号検出手段が、所定の検出期間内に同期信号を検出できなかったときに、該同期信号検出手段により検出されていた同期信号の検出タイミングに応じて生成した同期信号を再生用同期信号として内挿する内挿手段とを設けるようにする。

そして、上記内挿手段による同期信号の内挿が開始された後における所定の条件下で、上記同期信号検出手段により連続して検出される同期信号が正常なタイミングであるか否かについての判定を行う判定手段と、上記判定手段の判定結果に応じて、上記同期信号検出手段により検出される同期信号を再生用同期信号として出力する再同期手段とを備えるようにした。

【0021】

また、本発明では、同期信号検出方法として以下のようすることとした。

すなわち、所定のフォーマットに従ってフレーム単位により形成される信号を入力し、上記フレーム内に挿入される同期信号を検出する同期信号検出手順と、上記同期信号検出手順により、所定の検出期間内に同期信号を検出できなかったときに、該同期信号検出手順により検出されていた同期信号の検出タイミングに応じて生成した同期信号を再生用同期信号として内挿する内挿手順とを実行し、さらに、上記内挿手順による同期信号の内挿が開始された後における所定の条件下で、上記同期信号検出手順により連続して検出される同期信号が正常なタイミングであるか否かについての判定を行う判定手順と、上記判定手順の判定結果に応じて、上記同期信号検出手順により検出される同期信号を再生用同期信号として出力する再同期手段とを実行することとした。

【0022】

上記本発明によれば、入力信号からの同期信号が所定の検出期間内に検出されなくなり、同期信号の内挿が開始された後の所定の条件下において、上記入力信号から連続して検出される同期信号が正常なタイミングで検出されているか否かについての判定が行われる。

そして、この判定結果に応じて、入力信号から検出される同期信号と再生用同期信号との再同期動作が行われるようになる。

つまり、本発明によつては、同期信号の内挿が開始された後の所定の条件下において、入力信号から連続して検出される各同期信号が正常なタイミングで以て検出されている状態が得られるのに応じて、検出された同期信号を利用した再同期動作を行うことが可能となるものである。

【0023】**【発明の実施の形態】**

以下、本発明の同期信号検出装置が、ディスク記録媒体に記録されているデジタルデータについての再生を行うことのできるディスク再生装置に適用される場合を例に挙げる。

図1は、本発明の実施の形態としての同期信号検出装置が適用されるディスク

再生装置0の構成を示している。この図に示すディスク再生装置0は、DVDフォーマットの光ディスクとしての、例えばDVD-R、DVD-RW、DVD-RAM等の記録可能なディスクに対応してデータの再生が可能な構成を採る。

【0024】

この図において、ディスク1は、再生動作時においてスピンドルモータ2によって所定の回転制御方式(CAV(Constant Angular Velocity), CLV(Constant Linear Velocity), ZCLV(Zoned Constant Linear Velocity)など)により回転駆動される。そして光学ヘッド3によってディスク1上のトラックに記録されたピットデータやトラックのウォブリング情報の読み出しがおこなわれる。グループ、又はランドとして形成されているトラック上にデータとして記録されるピットはいわゆる色素変化ピット又は相変化ピットである。

【0025】

上記のようにしてディスク1からのデータ読み出し動作を行うため、光学ヘッド3はレーザ出力を行うレーザダイオード3cや、偏光ビームスプリッタ、1/4波長板などから構成される光学系3d、レーザ出力端となる対物レンズ3a、及び反射光を検出するためのディテクタ3bなどが備えられている。

対物レンズ3aは2軸機構4によってディスク半径方向(トラッキング方向)及びディスクに接離する方向に変移可能に保持されており、また、光学ヘッド3全体はスレッド機構5によりディスク半径方向に移動可能とされている。

【0026】

上記した光学ヘッド3の再生動作により、ディスク1から検出された情報はRFアンプ6に供給される。この場合、RFアンプ6においては、入力された情報について増幅処理、及び所要の演算処理等を施すことにより、再生RF信号、トラッキングエラー信号、フォーカスエラー信号等を得る。

【0027】

デフェクト(DEFECT)検出回路20は、上記RFアンプ6より供給される再生RF信号の振幅レベルと、内部に設定される閾値とを比較し、上記振幅レベルが閾値以下となる場合を検出する。そして、再生RF信号の振幅レベルが閾値以下となったことを検出するのに応じ、後述する同期検出回路21に対して信号DE

F E C Tを出力する。

【0028】

光学系サーボ回路16では、R Fアンプ6から供給されたトラッキングエラー信号、フォーカスエラー信号、及びシステムコントローラ18からのトラックジャンプ指令、アクセス指令などに基づいて各種サーボ駆動信号を発生させ、2軸機構4及びスレッド機構5を制御してフォーカス及びトラッキング制御を行う

【0029】

また、R Fアンプ6にて得られた再生R F信号は、図示する信号処理部7内の2値化回路8に供給されることで、E F M+方式(8/16変調、R L L(2,10))により記録符号化された、いわゆるE F M+信号の形式となって出力され、図のようにレジスタ9、P L L／スピンドルサーボ回路19に対して供給される。

また、トラッキングエラー信号、フォーカスエラー信号は光学系サーボ回路12に供給される。

【0030】

上記2値化回路8からレジスタ9を介してE F M+デコード回路10に供給されたE F M+信号は、ここでE F M+復調される。

このE F M+デコード回路10は、入力されたE F M+信号についての復調処理を、後述する検出回路21から出力される再生用シンク、及び図示するP L L／スピンドルサーボ回路19より供給されるP L C Kに応じたタイミングで実行する。

【0031】

ここで、上記のようにしてE F M+デコード回路10に供給されるE F M+信号としては、図3に示すような構造を有している。

つまり、上記E F M+信号は、この図に示すようにして、1 r o wが、2つのフレームの連続により形成されたうえで、13 r o w sの集合により成る。

また、1つのフレームは、図のように182バイト(1456ビット)のデータフレームに対して、32ビットのS Y 0～S Y 7の何れかのシンクパターン(同期信号)が先頭に付加される構造を有する。従って、このE F M+信号としては、上記フレームシンクを含んだ1フレームを構成するチャンネルビット数が、1

488チャンネルビット（1488T）であることになる。

【0032】

上記EFM+デコード回路10によりEFM+復調されたデータは、ECC／デインターリーブ処理回路11に供給される。ECC／デインターリーブ処理回路11では、RAM12に対してデータの書き込み及び読み出し動作を所定タイミングで行いながらエラー訂正処理及びデインターリーブ処理を実行していく。ECC／デインターリーブ処理回路12によりエラー訂正処理及びデインターリーブ処理が施されたデータは、後述するバッファマネージャ13に対して供給される。

【0033】

PLL／スピンドルサーボ回路19では、2値化回路8から供給されたEFM+信号を入力してPLL回路を動作させることにより、EFM+信号に同期した再生クロックとしての信号PLCKを出力する。この信号PLCKは、マスタークロックとして、信号処理部7内における処理基準クロックとなる。従って、信号処理部7の信号処理系の動作タイミングは、スピンドルモータ2の回転速度に追従したものとなる。

【0034】

モータドライバ17は、PLL／スピンドルサーボ回路19から供給された、例えばスピンドルサーボ制御信号に基づいてモータ駆動信号を生成してスピンドルモータ2に供給する。これにより、スピンドルモータ2は、所定の回転制御方式に従った適正な回転速度が得られるようにディスクを回転駆動する。

【0035】

同期検出回路21では、PLL／スピンドルサーボ回路19から入力される信号PLCKを基準クロックとして、レジスタ9を介して供給されるEFM+信号からフレームシンク（フレーム同期信号）を検出するための動作を行う。

また、この同期検出回路21では、ドロップアウトやジッターの影響でデータ中のシンクパターンが欠落したり、同じシンクパターンが検出されたりした場合のために、後述するようにしてフレームシンクの内挿処理及びウィンドウ保護等の処理も実行するようにされている。

なお、この同期検出回路 21 の内部構成については後述する。

【0036】

前述のようにして信号処理部 7 の ECC/デインターリーブ処理回路 11 から出力されたデータは、バッファマネージャ 13 に対して供給される。

バッファマネージャ 13 では、供給される再生データをバッファ RAM 14 に一時蓄積させるためのメモリ制御を実行する。このディスク再生装置 0 からの再生出力としては、バッファ RAM 14 にバッファリングされているデータが読み出されて転送出力されることになる。

【0037】

インターフェイス部 15 は、外部のホストコンピュータ 50 と接続され、ホストコンピュータ 50 との間で再生データや各種コマンド等の通信を行う。

この場合、バッファマネージャ 13 がバッファ RAM 14 に一時蓄積させた再生データから必要量の読み出しを行い、インターフェイス部 15 に対して転送するようにされる。そして、インターフェイス部 15 では、転送されてきた再生データを、例えば所定のデータインターフェイスフォーマットに従ってパケット化などの処理を行って、ホストコンピュータ 50 に対して送信出力することになる。

なお、ホストコンピュータ 50 からのリードコマンド、ライトコマンドその他の信号はインターフェイス部 15 を介してシステムコントローラ 18 に供給される。

【0038】

システムコントローラ 18 は、マイクロコンピュータ等を備えて構成され、当該再生装置を構成する各機能回路部が実行すべき所要の動作に応じて適宜制御処理を実行する。

【0039】

なお、この図 1 では、ホストコンピュータ 50 に接続されるディスク再生装置 0 としたが、本発明の再生装置としてはホストコンピュータ 50 等と接続されない形態もあり得る。その場合は、操作部や表示部が設けられたり、データ入出力のインターフェイス部位の構成が、図 1 とは異なるものとなる。つまり、ユーザ

一の操作に応じて再生が行われるとともに、各種データの入出力のための端子部が形成されればよい。

【0040】

ここで、前述した同期検出回路21について、その内部構成を図2のブロック図に示す。

図2において、同期検出回路21は、図示するようにフレームシンク検出回路22、ウィンドウ生成回路23、内挿シンク生成回路24、シンク判定回路25、前方保護カウンタ26、エッジ検出回路27、ビットカウンタ28、一致回数カウンタ29、ウィンドウオープン信号生成回路30を有して構成されている。

【0041】

先ず、フレームシンク検出回路22には、図1において説明した2値化回路8により生成されたEFM+信号が、レジスタ9を介して供給される。

このフレームシンク検出回路22は、入力されるEFM+信号から、先に図3に示したようなフレームシンクの先頭に配される32ビットのシンクパターンを検出する。そして、この検出シンク(SYNC・D)は、図のようにウィンドウ生成回路23、内挿シンク生成回路24、シンク判定回路25、及びビットカウンタ28に対して出力される。

【0042】

ウィンドウ生成回路23は、上記フレームシンク検出回路22により検出されたフレームシンクに基づき、シンク検出タイミングとしてのウィンドウ期間を設定するための信号WINDOWを生成する。

この信号WINDOWとしては、Hレベルとする期間がウィンドウ期間となるようにして生成される。

【0043】

内挿シンク生成回路24は、フレームシンク欠落時や、フレームシンクが信号WINDOWがHレベルとなる期間外で検出された場合に再生用シンクを補間するための、内挿シンクを生成する。この内挿シンク生成回路24は、上記フレームシンク検出回路22より供給される検出シンクのタイミングに同期した内挿シンクSYNC・Iを生成する。

【0044】

シンク判定回路25は、フレームシンク検出回路22により供給される検出シンクSYNC・Dと、上記ウィンドウ生成回路23より供給される信号WINDOWとを比較することにより、フレームシンクがウィンドウ内に検出されているか否かの判別を行う。

このシンク判定回路25は、フレームシンクがウィンドウ内において検出されていると判別した場合、検出されたフレームシンクを、再生用シンクとして出力する。

また、これと共にこのシンク判定回路25は、このようにフレームシンクがウィンドウ内において検出されるのに応じ、後述するビットカウンタ28、及び一致回数カウンタ29の動作状態をリセットするためのリセット信号RSTを出力する。

一方、フレームシンクがウィンドウ内において検出されなかったと判別した場合は、上記内挿シンク生成回路24より供給される内挿シンクSYNC・Iを再生用シンクとして出力するようにされる。

そして、これと共にシンク判定回路25は、フレームシンクがウィンドウ内において検出されなかったことに応じ、次に説明する前方保護カウンタ26に対し、カウント値を1インクリメントさせるための信号を供給する。

【0045】

前方保護カウンタ26は、上記シンク判定回路25の判定結果に基づき、フレームシンクがウィンドウ内において検出されなかった回数をカウントする。そして、このカウント値と、前方保護回数として内部に設定されている値とが一致するのに応じ、ウィンドウオープン信号生成回路30に対して信号WINDOW-OPENの出力を指示するための信号を出力するようにされる。

この前方保護カウンタ26におけるカウント値は、上記のようにして信号WINDOW-OPENの出力を指示したとき、及びシンクの再同期が行われたときにリセットされる。

なお、この場合の上記前方保護回数としては、例えば10回が設定されているとする。

【0046】

エッジ検出回路27には、図1に示したデフェクト検出回路20から信号DEFECTが供給される。

このエッジ検出回路27は、供給される信号DEFECTの、例えば立ち下がりエッジを検出することにより、デフェクト状態が解消された時点を検出ようにされる。

このエッジ検出回路27による検出出力は、ビットカウンタ28に供給される。

【0047】

ビットカウンタ28は、デフェクト状態の解消後、フレームシンク検出回路22において検出される各フレームシンクのビット間隔についてのカウントを行う。また、このように再検出された各シンクがフォーマットで規定された正しい間隔で得られているかを検出する。

すなわち、まず、上記エッジ検出回路27によりデフェクト信号の立ち下がりエッジが検出され、且つフレームシンク検出回路22よりフレームシンクが検出されるのに応じ、カウント動作を開始する。そして、再びフレームシンクが検出されるまでのビット数をカウントし、このカウント値と、内部に設定されている所定の比較参照値との一致を検出する。

本実施の形態の場合、ここでは先に図5に示したようなDVDフォーマットに規定されるビット間隔との一致を検出するようにされるため、このようにしてビットカウンタ28に設定される比較参照値としては、図示するように「1488」とされる。

なお、このビットカウンタ28は、フレームシンク検出回路22によりシンクが検出されるのに応じて、カウント値をリセットした上でカウントを開始するように動作する。

また、このビットカウンタ28は、前述したようにしてフレームシンクがウィンドウ内において検出されるのに対応してシンク判定回路25からリセット信号RSTが入力されると、動作状態をリセットするようにされる。つまり、エッジ検出回路27からの検出出力が入力され、且つ検出シンクが入力されるまで、カ

ウント値をリセットした状態で待機するようにされるものである。

【0048】

一致回数カウンタ29は、上記ビットカウンタ28による検出出力を元に、デフェクト状態の解消後において再検出されたシンクが、フォーマットで規定された正しい間隔でもって何回連続して得られたかについてカウントする。そして、このカウント値が内部に設定されている所定の最大値以上となった場合は、信号WINDOW-OPENの出力を指示するための信号をウィンドウオープン信号生成回路30に対して出力する。ここでは、上記最大値として例えば「2」を設定していることとする。

なお、この一致回数カウンタ29は、上記のようにして信号WINDOW-OPENの出力を指示するための信号をウィンドウオープン信号生成回路30に対して出力すると、カウント値をリセットする。

また、この一致回数カウンタ29は、フレームシンクがウィンドウ内において検出されるのに対応してシンク判定回路25からリセット信号RSTが入力される事に依りても、カウント値をリセットする。

【0049】

ウィンドウオープン信号生成回路30は、上記前方保護カウンタ26、又は上記一致回数カウンタ29からの指示信号に基づき、ウィンドウをオープンするための信号WINDOW-OPENをウィンドウ生成回路23に対して出力する。

【0050】

上記のようにして構成される同期検出回路21において得られる動作を、次の図4に示すタイミングチャートを用いて説明する。

まず、この図において、図4(a)に示す信号DEFECTは、図1に示すデフェクト検出回路20により生成されるものであり、デフェクト状態が検出されている間は、図のようにHレベルが出力されるものとなる。

また、図4(b)に示す検出シンクSYNC・Dは、上記フレームシンク検出回路22により生成される信号であり、フレームシンクが検出されたタイミングに応じてHレベルのパルスが得られる。

図4(c)に示す信号WINDOWは、上記したようにウィンドウ生成回路2

3により生成される信号であって、図示するようにHレベルとなる期間がウィンドウ期間とされ、このウィンドウ期間において検出された検出シンク SYNC・Dのみが再生用シンクとして有効となる。

【0051】

図4(d)の内挿シンク SYNC・Iは、内挿シンク生成回路24により生成される信号である。

また、図4(e)は前方保護カウンタ26の値であり、ここではカウント値がインクリメントされるタイミングが示される。

さらに、図4(f)に示す信号 WINDOW-OPENは、上記ウィンドウオープン信号生成回路30により生成される信号であり、また、図4(g)に示す再生用シンクは、シンク判定回路25より出力される信号である。

【0052】

この図4において、先ず、図示する時点t1より以前の期間では、図中にウィンドウ期間として示した信号 WINDOWがHレベルとなる期間内において、検出シンク SYNC・DがHレベルとなっており、この期間はフレームシンク検出回路22により正常にフレームシンクが検出されている状態となっている。

また、この状態では、シンク判定回路25により検出シンクが出力されるようになるため、EFM+デコード回路15に供給される再生用シンクとしては、図示するように上記検出シンク SYNC・Dのタイミングに同期する。

【0053】

ここで、図中時点t1において、例えばディスク上の傷等により再生RF信号の振幅が所定値以下となり、デフェクト検出回路20によりデフェクト状態が検出されたとする。そして、これと共に、この時点t1直後の期間Aで示すウィンドウ期間において、フレームシンク検出回路22によりフレームシンクが検出されなくなったとする。

すると、これに応じては、再生用シンクを補間するために、シンク判定回路25により、内挿シンク生成回路24において生成される内挿シンク SYNC・Iが出力されるようになる。つまり、この時点より、前方保護動作が開始されるようになるものである。

また、これと共に、上記シンク判定回路 25 によっては、前方保護カウンタ 26 に対してカウント値を 1 インクリメントするための動作が行われ、これに応じ、図示するように時点 t 2 において前方保護カウンタ 26 の値が「1」となる。

この前方保護カウンタ 26 の値は、以降もウィンドウ期間においてフレームシンクが検出されない場合は、このシンク判定回路 25 によりインクリメントされていくものとなる。

そして、この場合は、先に図 2 において説明したようにして前方保護回数としては「10」回が設定されているため、上記のようなシンクの内挿動作は、このカウント値が「10」となる時点まで行われるべきものとなる。

【0054】

このようにしてウィンドウ内にフレームシンクが検出されなくなった時点 t 2 以降における時点 t 3 において、図のようにして信号 DEFECT が L レベルに立ち下がり、デフェクト状態が解消したとされる状態になったとする。

これに応じては、エッジ検出回路 27 によりこの信号 DEFECT の立ち下がりエッジが検出され、この検出出力がビットカウンタ 28 に対して出力される。これにより、ビットカウンタ 28 では、フレームシンク検出回路 22 から検出シンク SYNC・D が入力されたときにビットカウントを開始するようにリセットされる。

【0055】

ここで、図示する時点 t 4 において、フレームシンク検出回路 22 により、再びフレームシンクが検出されるようになったとする。また、この際、このように再び検出されたフレームシンクが、図のようにウィンドウ外となるタイミングのものであったとする。

まず、このようにして、デフェクト状態解消後に再び検出されたフレームシンクがウィンドウ外となるタイミングのものであった場合には、シンク判定回路 25 による内挿シンク SYNC・I の出力は継続されることとなる。

つまり、このようにしてフレームシンクがウィンドウ期間に検出されない場合は、先に説明した前方保護動作が引き続き行われることにより、この場合は、図 4 (a)、図 4 (g) を参照してわかるように、再生用シンクとして内挿シンク

が継続して使用されるようになるものである。

【0056】

また、これと共に、この時点 t_4 において、フレームシンク検出回路 22 による検出出力（検出シンク）がビットカウンタ 28 に入力されると、このビットカウンタ 28 は、チャンネルクロック（信号 PLCK）のタイミングでカウントを開始する。

そして、時点 t_5 において、図のように再びフレームシンクが検出されると、上記時点 t_4 において検出されたフレームシンクから、この時点 t_5 において検出されたフレームシンクまでのビット間隔がカウント値として得られるようになる。

【0057】

このようにしてビットカウンタ 28 によりカウントされたカウント値は、該ビットカウンタ 28 内において、フォーマットで規定された正しいビット間隔を示す比較参照値と比較される。すなわち、この場合は、先に図 2 において説明したように、DVD フォーマットにより規定された 1 フレーム分のビット数「1488」と比較されるものである。

そして、例えばこの比較参照値と上記カウントしたカウント値との一致が検出された場合は、この検出出力が一致回数カウンタ 29 に供給される。

【0058】

この時点 t_5 において、ビットカウンタ 28 では、検出されたフレームシンク間のビット数をカウントすると、カウント値がリセットされ、再びビット数のカウントが開始される。

そして、図示する時点 t_6 において、再びフレームシンクが検出された場合、ビットカウンタ 28 では、上記と同様にしてこれらのフレームシンク間のビット数のカウント値と内部に設定された値「1488」との一致を検出するようにされる。

【0059】

ここで、図示するようにして、上記時点 t_4 、時点 t_5 においてそれぞれ検出されたフレームシンクと、この時点 t_5 において検出されたフレームシンク及び

時点 t_6 において検出されたフレームシンクとが、共に「1488」ビットの間隔で検出されたとする。

すると、先ず時点 t_5 においては、ビットカウンタ 28 により、カウントしたフレームシンク間 ($t_4 - t_5$ 間) のビット数と内部の比較参照値「1488」との一致が検出され、この検出出力が一致回数カウンタ 29 に対して供給される。そして、これに応じ、一致回数カウンタ 29 のカウント値が 1 インクリメントされる。

そして、時点 t_6 においても同様に、このビットカウンタ 28 により、フレームシンク間 ($t_5 - t_6$ 間) のビット数と上記比較参照値「1488」との一致を示す検出出力が、一致回数カウンタ 29 に対して供給される。

【0060】

このようにして、上記一致回数カウンタ 29 に対し、ビットカウンタ 28 からの検出出力が 2 度にわたって供給されることによっては、この一致回数カウンタ 29 の連続一致回数の値「2」が、内部に設定された最大値「2」に達したことが検出されるようになる。

そして、これによつては、先に図 2 において説明したようにして、この検出出力がウィンドウオープン信号生成回路 30 に供給され、ウィンドウ生成回路 23 に対して信号 WINDOW-OPEN が供給されるようになる。

【0061】

このようにしてウィンドウ生成回路 23 に対して信号 WINDOW-OPEN が供給されることにより、図示するようにして、時点 t_7 において検出されるフレームシンクが、信号 WINDOW の H レベル期間 (ウィンドウ期間) 内に検出されるようになる。

そして、これに応じてはシンク判定回路 25 においてウィンドウ内にフレームシンクが検出されたことが判別され、このシンク判定回路 25 からは、検出シンク SYNC・D が出力されるようになる。

これにより、この時点 t_7 においては、図 4 (b)、図 4 (g) を参照してもわかるように、再生用シンクとして、フレームシンク検出回路 22 により検出されたフレームシンクが使用されるようになり、シンクの再同期が行われることと

なる。

【0062】

このようにして、本実施の形態では、デフェクト解消後において検出されたフレームシンクが、「1488」ビット間隔で2回連続して検出された場合は、その時点でシンクの再同期を行うようにしたものである。

つまり、このようにしてデフェクト解消後において検出されたフレームシンクが、フォーマットで規定された正しいビット間隔で2回連続して得られていることが検出された場合は、適正なタイミングでフレームシンクが検出されているものとみなし、シンクの再同期を行うようにしたものである。

これにより、この場合は前方保護動作のみを行って、前方保護回数として設定される「10」回に応じた回数分シンクを内挿する場合よりも、図示するようにより早くシンクの再同期を行うことができるようになる。

つまり、この場合は、再生用シンクとして、より早く本来期待されたタイミングのフレームシンクを使用することができるようになるものである。

【0063】

続いて、上記図4において説明した動作について、図2に示した同期検出回路21の各部において行われる信号処理動作の流れを、次の図5のフローチャートを用いて説明する。

まず、この図5において、図示するステップS101より開始される処理動作は、上記図4において説明したような前方保護動作を実現するための処理動作である。

つまり、フレームシンクがウィンドウ内に検出されなくなった場合に、設定された前方保護回数に対応した回数分シンクを内挿する動作である。

【0064】

このため、先ず図示するステップS101においては、フレームシンクがウィンドウ内において検出されなくなったことを監視するようにする。

つまり、シンク判定回路25において、フレームシンク検出回路21から供給される検出シンクSYNC・D、及びウィンドウ生成回路23から供給される信号WINDOWを比較することで、フレームシンクがウィンドウ内において検出

されなくなったことを判別するものである。

そして、このようにしてフレームシンクがウィンドウ内において検出されなくなったことが判別された場合は、ステップS102に進む。

【0065】

ステップS102においては、上記シンク判定回路25が、内挿シンク生成回路24により生成される内挿シンクSYNC・Iを、再生用シンクとして出力する。

【0066】

続くステップS103においては、上記ステップS101においてフレームシンクがウィンドウ内に検出されなかったのに応じ、上記シンク判定回路25が、前方保護カウンタ26の値を1インクリメントするための信号を出力する。そして、これに応じ、前方保護カウンタ26では、カウント値を1インクリメントする。

【0067】

ステップS104においては、前方保護カウンタ26が、該前方保護カウンタの値が内部に前方保護回数として設定された値「10」以上となったか否かを判別する。この前方保護カウンタ26の値が前方保護回数以上となっていない場合は、ステップS101に進み、再びフレームシンクがウィンドウ内に検出されない状態か否かを判定する。

また、この前方保護カウンタ26の値が前方保護回数以上となった場合は、信号WINDOW-OPENを出力させるための信号をウィンドウオープン信号生成回路30に対して供給し、後述するステップS110に進む。

【0068】

ここで、図2において示した同期検出回路21においては、上記ステップS101～ステップS104までに示した前方保護動作のための処理動作に平行して、図示するステップS105以降の、シンクの検出間隔に基づいたシンクの再同期動作のための動作も行われる。

【0069】

まず、ステップS105においては、エッジ検出回路27が、図1に示したデ

フェクト検出回路20より供給される信号DEFECTの、例えば立ち下がりエッジを検出することにより、デフェクト状態が解消されたことを監視する。

そして、続くステップS106においては、フレームシンク検出回路22により、フレームシンクが再び検出されたことを監視するようにする。

【0070】

その上で、ステップS107においては、ビットカウンタ28が、上記エッジ検出回路27により検出出力されたデフェクト信号の立ち下がりエッジ、及び上記フレームシンク検出回路22により検出出力された検出シンクに応じ、ビットカウントを開始するようにする。

そして、このビットカウンタ28においては、先に説明したようにして、以降はフレームシンクが検出されるごとに、カウント値と内部に設定された比較参照値「1488」との一致を検出するようにする。さらに、このようなカウント値と比較参照値「1488」の一致が検出された場合は、この検出出力を一致回数カウンタ29に対して供給する。

【0071】

続くステップS108においては、再検出された各フレームシンクが、フォーマットにより規定された正しいビット間隔(1488T)で2回連続して得られたか否かを判別する。つまり、このステップS108の動作としては、一致回数カウンタ29に対し、ビットカウンタ28からの検出出力が2回連続して供給されたか否かに対応する。

このステップS108において、一致回数カウンタ29に対してビットカウンタ28からの検出出力が2回連続して供給されず、再検出された各フレームシンクが1488Tの正しいビット間隔で2回連続して得られていないとされた場合は、ステップS109に進み、シンクの再同期動作が行われたか否かを判別するようにされる。すなわち、前述した前方保護動作によりシンクの再同期が行われたか否かを判別する。

このステップS109における動作は、ビットカウンタ28及び一致回数カウンタ29が、シンク判定回路25からのリセット信号RSTの供給を受けたか否かに対応するものである。

ここで、上記リセット信号 R S T とは、先にも説明したように、フレームシンクがウィンドウ内において検出されるのに応じて、ビットカウンタ 28 及び一致回数カウンタ 29 の動作をリセットするための信号である。つまり、このリセット信号 R S T とは、ビットカウンタ 28 及び一致回数カウンタ 29 のカウント動作が開始された後、例えばシンクの再同期動作が行われたことによりシンクがウィンドウ内に検出されるようになったときに、これらビットカウンタ 28 及び一致回数カウンタ 29 の動作をリセットするためのものとなる。

このステップ S 109 において、シンクの再同期が未だ行われておらず、シンク判定回路 25 よりリセット信号 R S T が出力されていない場合は、ステップ S 108 に進み、引き続き各フレームシンクが 1488 T の正しいビット間隔で 2 回連続して得られているか否かを判別するようにされる。

また、シンクの再同期が行われ、上記シンク判定回路 25 からのリセット信号 R S T が出力された場合は、図示するようにしてステップ S 105 に進む。

すなわち、この場合、ビットカウンタ 28 としては、エッジ検出回路 27 からの検出出力 (S 105)、及びフレームシンク検出回路 22 からの検出シンクの供給 (S 106) を再び待機するようリセットされることとなる。また、同様に一致回数カウンタ 29 としても、このようにシンク判定回路 25 からのリセット信号 R S T の供給を受け、カウント値がリセットされるようになる。

【0072】

また、上記ステップ S 108 において、再検出された各フレームシンクが 1488 T の正しいビット間隔で 2 回連続して得られているとされた場合は、一致回数カウンタ 29 が、信号 WINDOW-OPEN を出力させるための信号をウィンドウオープン信号生成回路 30 に対して供給し、ステップ S 110 に進む。

【0073】

ステップ S 110 においては、ウィンドウオープン信号生成回路 30 が、上記前方保護カウンタ 26、又は一致回数カウンタ 29 より供給された信号に応じて、信号 WINDOW-OPEN をウィンドウ生成回路 23 に対して出力する。

【0074】

続くステップ S 111 においては、ウィンドウ生成回路 23 が、上記供給され

たWINDOW-OPEN信号に基づいてウィンドウをオープンし、フレームシンクがウィンドウ内において検出されるようにする。

そして、このようにフレームシンクがウィンドウ内において検出されるようになるのに応じて、シンク判定回路25が、再生用シンクとして検出シンクSYN C・Dを出力するようにする。

これによりシンクの再同期動作が行われるようになる。

【0075】

ステップS111において、このようにしてシンクの再同期動作が実行されると、前方保護動作のための処理動作としては、図示するようにステップS101に進み、再びフレームシンクがウィンドウ内に検出されないことを監視するようにされる。また、一方の、シンクの検出間隔に基づいたシンクの再同期動作のための処理動作としては、図示するようにしてステップS105に進み、再び信号DEFECTの立ち下がりエッジが検出されるのを監視するようにされる。

【0076】

このようにして、図2に示した同期検出回路21の動作によっては、上記ステップS104において前方保護カウンタ26の値が前方保護回数に達するか、或るいはステップS108において1488Tが2回連続して検出された場合に、ステップS110、ステップS111と処理動作が進められてシンクの再同期が行われるようになる。

そして、上記ステップS104にて前方保護カウンタ26の値が前方保護回数に達するよりも、上記ステップS108における1488Tの2回連続一致の方が先に検出された場合には、前方保護動作により所定回数分シンクを内挿するよりも早く、ステップS111におけるシンクの再同期動作が行われるようになるものである。

なお、ここでの図示による説明は省略したが、このような同期検出回路21における実際の動作としては、再同期後のシンク検出位置についての補償を行う、所謂後方保護動作を行うようにされている。

すなわち、再同期後において検出されたフレームシンクが、ウィンドウ内において検出された回数を前方保護動作同様にカウントするようにし、このカウント

値が所定回数以上となるのに応じ、検出されたフレームシンクが正しいタイミングで以て得られていることを判別するようにするものである。

【0077】

以上、本実施の形態としてのディスク再生装置0について説明した。

上述もしたように、本実施の形態のディスク再生装置0では、同期検出回路21内に、ビットカウンタ28が設けられる。

このビットカウンタ28によっては、例えばデフェクト状態の解消後において、フレームシンク検出回路22により再び検出されたフレームシンクがウィンドウ外において検出された場合に、このように再検出されるようになった各フレームシンクが、フォーマットで規定された正しいビット間隔でもって得られているか否かが判定されるようになる。

そして、このように再検出されるようになった各フレームシンクが、フォーマットに規定された正しいビット間隔でもって、例えば2回連続して得られた場合には、ウィンドウオープン信号生成回路30により信号WINDOW-OPENが出力され、これに応じてシンクの再同期動作が行われるようになる。

すなわち、再検出後の各フレームシンクが、上記のようにして正常なタイミングでもって検出されているとみなされる場合には、これら再検出されるようになったフレームシンクがウィンドウ外において検出されている場合にも、シンクの再同期を行うようにしたものである。

【0078】

これにより本実施の形態のディスク再生装置0によっては、上記のようにして、再検出されるようになった各フレームシンクがフォーマットに規定された正しいビット間隔でもって2回連続して得られた場合に、直ちにシンクの再同期動作を行うことができるようになる。

そして、このような、各フレームシンクが正しいビット間隔でもって2回連続して得られた時点が、例えば前方保護動作が完了する以前であった場合には、従来よりも早くシンクの再同期動作を行うことができる。

【0079】

すなわち、この場合、再生用シンクとして本来期待されたシンク位置とは異なる

っている可能性の高い内挿シンクが使用されている状態を、従来に比してより早く解消できるようになるものである。

【0080】

なお、本実施の形態のディスク再生装置0において、図2に示した前方保護カウンタ26に設定される前方保護回数、及び一致回数カウンタ29において設定される連続一致回数としては、上記説明した回数に限定されるものではない。

【0081】

また、本実施の形態では、ディスク再生装置0が、DVDフォーマットに対応する再生信号に対応したものである場合を例に挙げたが、本実施の形態のディスク再生装置0としては、これ以外にも、例えばCD (Compact Disc) やMD (Mini Disc: 光磁気ディスク) 等の他のフォーマットに対応するようにされてもよい。

また、この場合、図2に示したビットカウンタ28において一致を検出するビット数としては、対応するフォーマットにより規定される1フレーム分のチャンネルビット数 (例えばCDフォーマットに対応するとされた場合は「588」) が設定されればよいものである。

【0082】

また、本実施の形態では、シンクの検出間隔に基づいたシンクの再同期動作が、デフェクト状態の解消後においてフレームシンクが検出されるのに応じてのみ行われるようにしたが、このようなシンクの再同期動作としては、例えば、単にフレームシンクがウィンドウ外で検出されるのに応じて開始されるようにしてもよい。

すなわち、本実施の形態としてのシンクの再同期動作としては、単に、シンクの内挿動作の開始後に検出されるフレームシンクが、正常なタイミングで得られていることに応じてシンクの再同期を行うようにすればよいものであり、従って、このようなシンクの再同期動作の開始は、フレームシンクが正しいタイミングで検出されなくなるとされる、所要の条件に応じるようにすればよいものである。

【0083】

また、本実施の形態では、本発明の同期信号検出装置が、ディスクからのデジタルデータを読み出してこれについての再生を行うディスク再生装置0に適用される場合を例に挙げた。

しかしながら、本発明の同期信号検出装置としては、このようなディスク再生装置以外にも、例えばデータ通信システムにおける送信装置から送信された、所定のフォーマットのデータについての受信処理を行う受信装置にも適用することができる。

例えば、上記受信装置側で受信したデータが、ストリーミング出力すべきオーディオデータや動画データなどである場合において、受信データに挿入されるフレーム同期信号に相当する信号の検出について本発明を適用することで、より良好なパフォーマンスによる受信データの再生出力が可能となるものである。

【0084】

【発明の効果】

以上で説明したように本発明では、入力信号からの同期信号が所定の検出期間内に検出されなくなり、同期信号の内挿が開始された後の所定の条件下において、上記入力信号から連続して検出される同期信号が正常なタイミングであるか否かについての判定を行うようにしている。

そして、この判定結果に応じ、入力信号から検出される同期信号と再生用同期信号との再同期動作を行うようにしている。

つまり、本発明によつては、同期信号の内挿が開始された後の所定の条件下において、入力信号から連続して検出される各同期信号が正常なタイミングで以て検出されている状態が得られるのに応じ、検出された同期信号を利用した再同期動作を行うことができる。

【0085】

これにより、上記のようにして入力信号から連続して検出される各同期信号が正常なタイミングで以て検出されている場合は、同期信号が内挿されていたことにより、本来期待されたタイミングとは異なる同期信号が再生用同期信号として使用されている状態を、直ちに解消できるようになる。

この結果、前方保護動作のみを行う場合に比べて、入力信号についての読み取

りパフォーマンスの向上を図ることができるようになる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

本発明における実施の形態としての同期信号検出装置が適用される、ディスク再生装置の内部構成を示したブロック図である。

【図 2】

実施の形態としての同期信号検出装置の内部構成を示したブロック図である。

【図 3】

E F M + データのデータ構造を示すデータ構造図である。

【図 4】

実施の形態の同期信号検出装置により得られる動作を説明するためのタイミングチャートである。

【図 5】

実施の形態の同期信号検出装置により得られる動作を説明するためのフローチャートである。

【図 6】

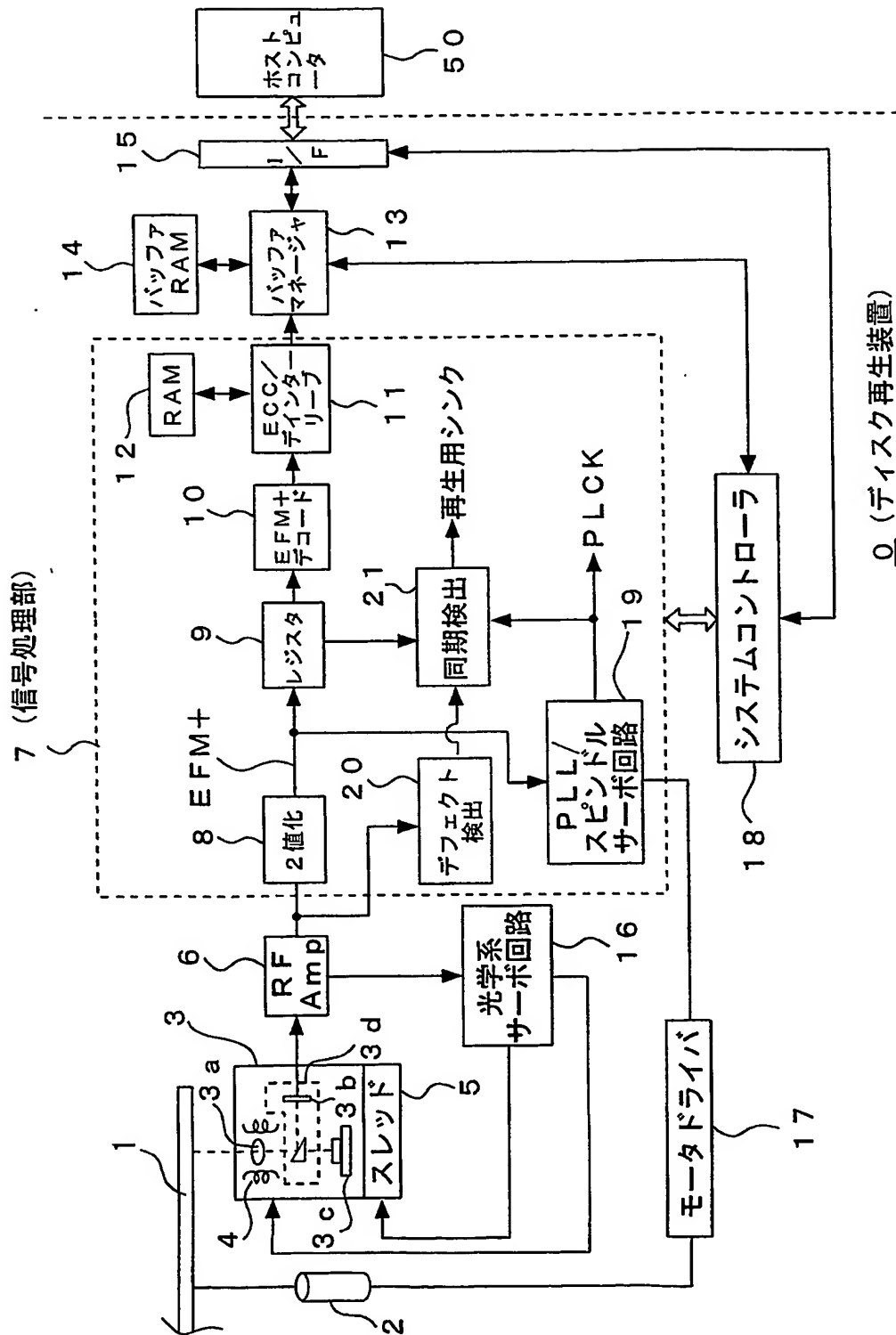
従来の前方保護動作を説明するためのタイミングチャートである。

【符号の説明】

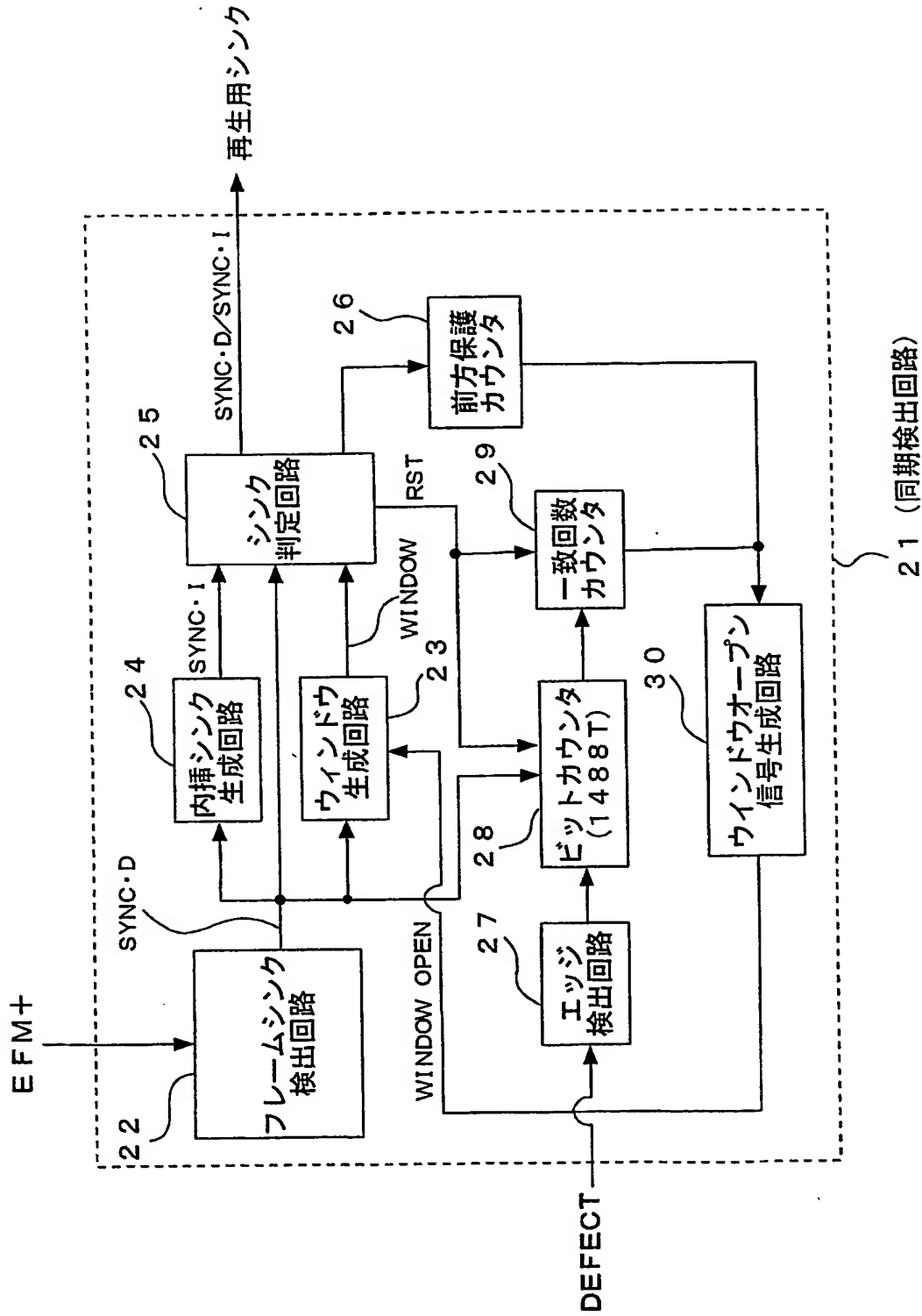
0 ディスク再生装置、1 ディスク、2 スピンドルモータ、3 光学ヘッド、3 a 対物レンズ、3 b デテクタ、3 c レーザダイオード、3 d 光学系、4 2 軸機構、5 スレッド機構、6 R F アンプ、7 信号処理部、8 2 値化回路、9 レジスタ、10 E F M + デコード回路、11 E C C / デインターリーブ回路、12 R A M、13 バッファマネージャ、14 バッファ R A M、15 インターフェイス部、16 光学系サーボ回路、17 モータドライバ、18 システムコントローラ、19 P L L / スピンドルサーボ回路、20 デフェクト検出回路、21 同期検出回路、22 フレームシンク検出回路、23 ウィンドウ生成回路、24 内挿シンク生成回路、25 シンク判定回路、26 前方保護カウンタ、27 エッジ検出回路、28 ビットカウンタ、29 一致回数カウンタ、30 ウィンドウオープン信号生成回路

【書類名】 図面

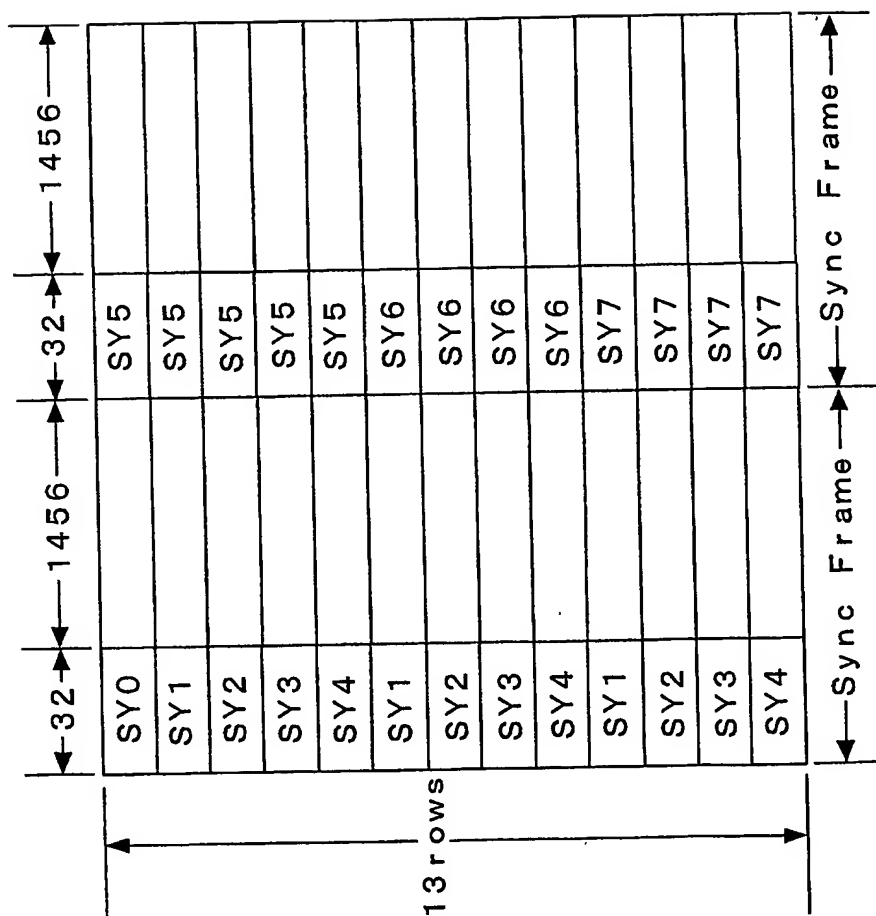
【図 1】



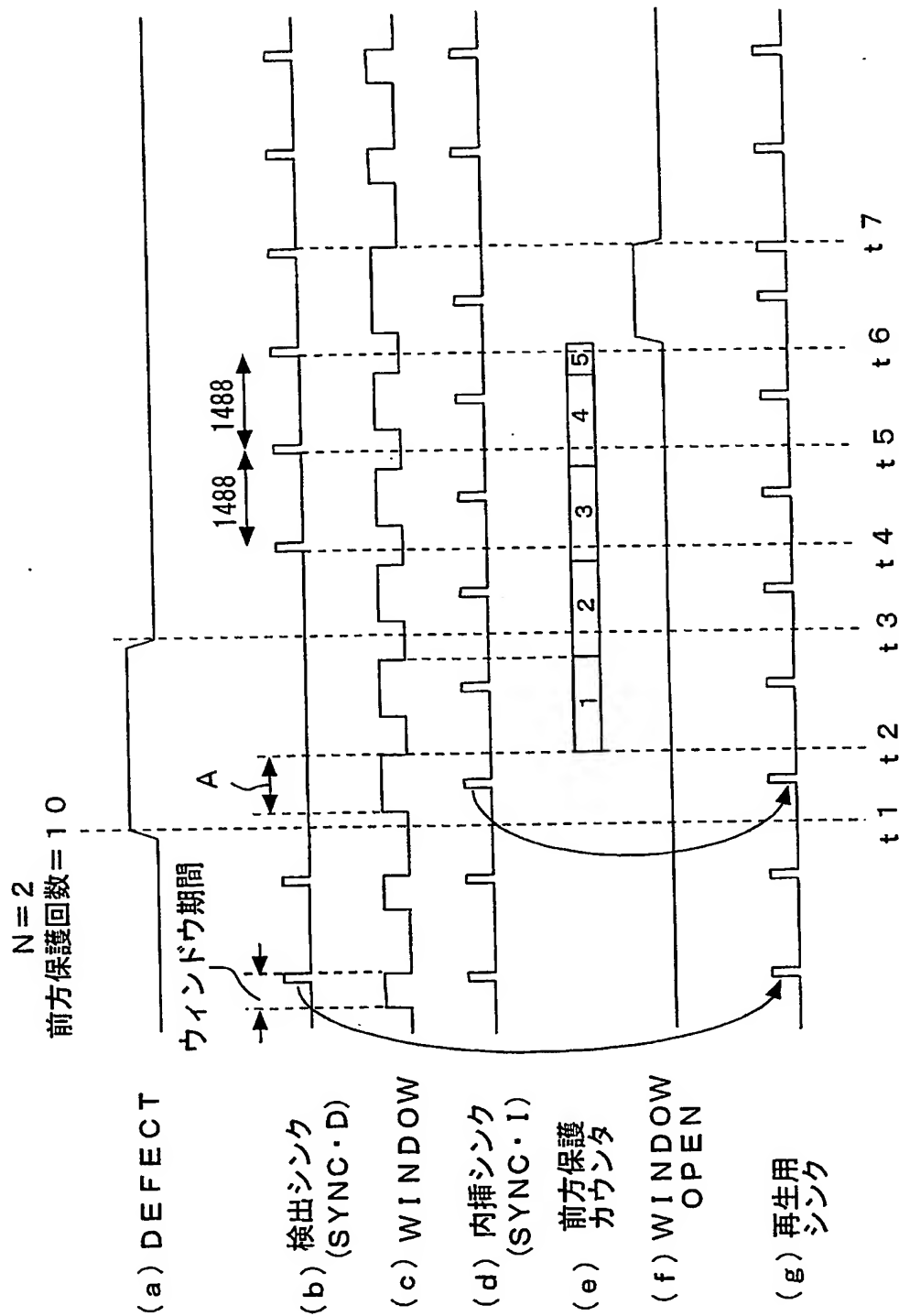
【図 2】



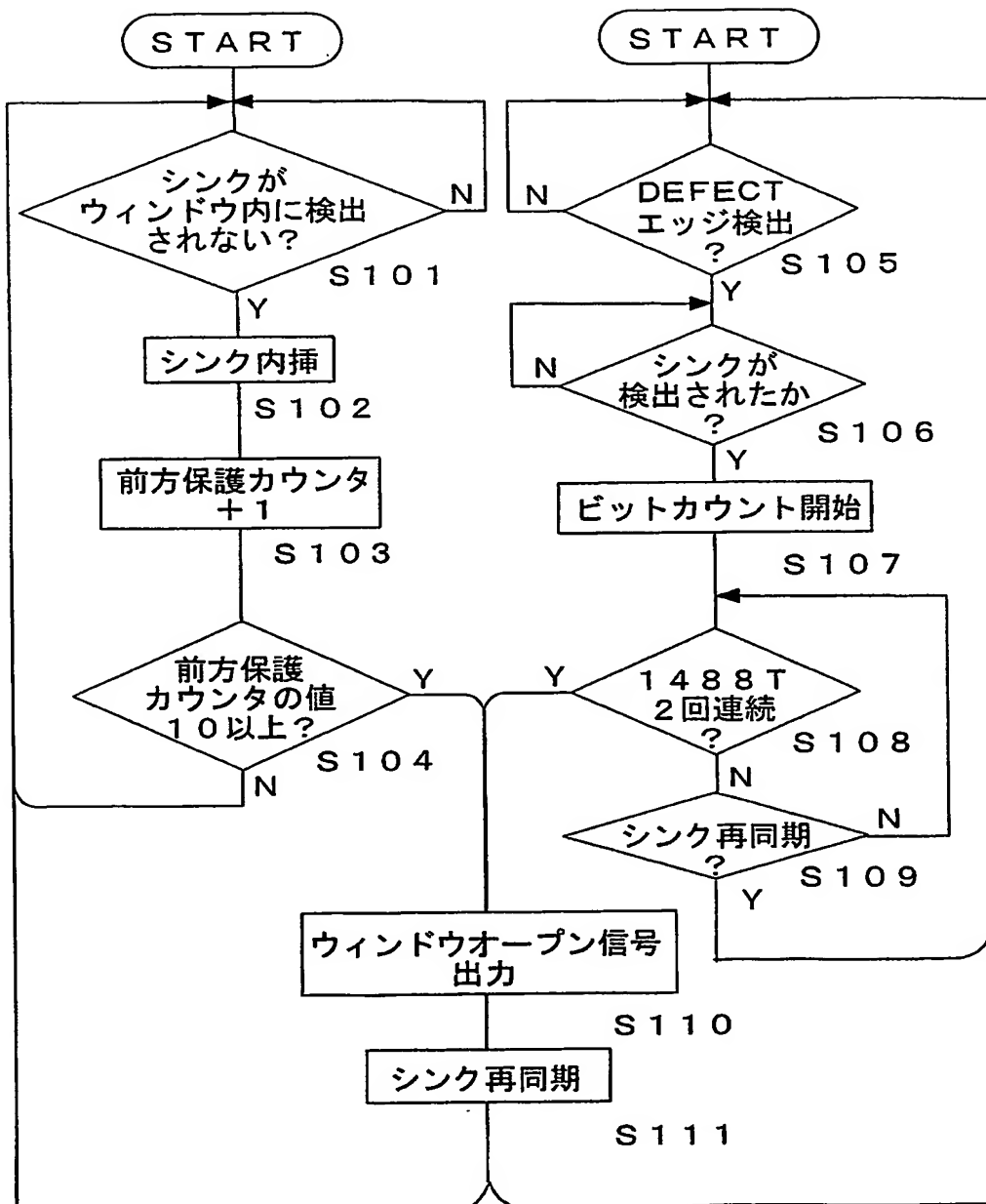
【図 3】



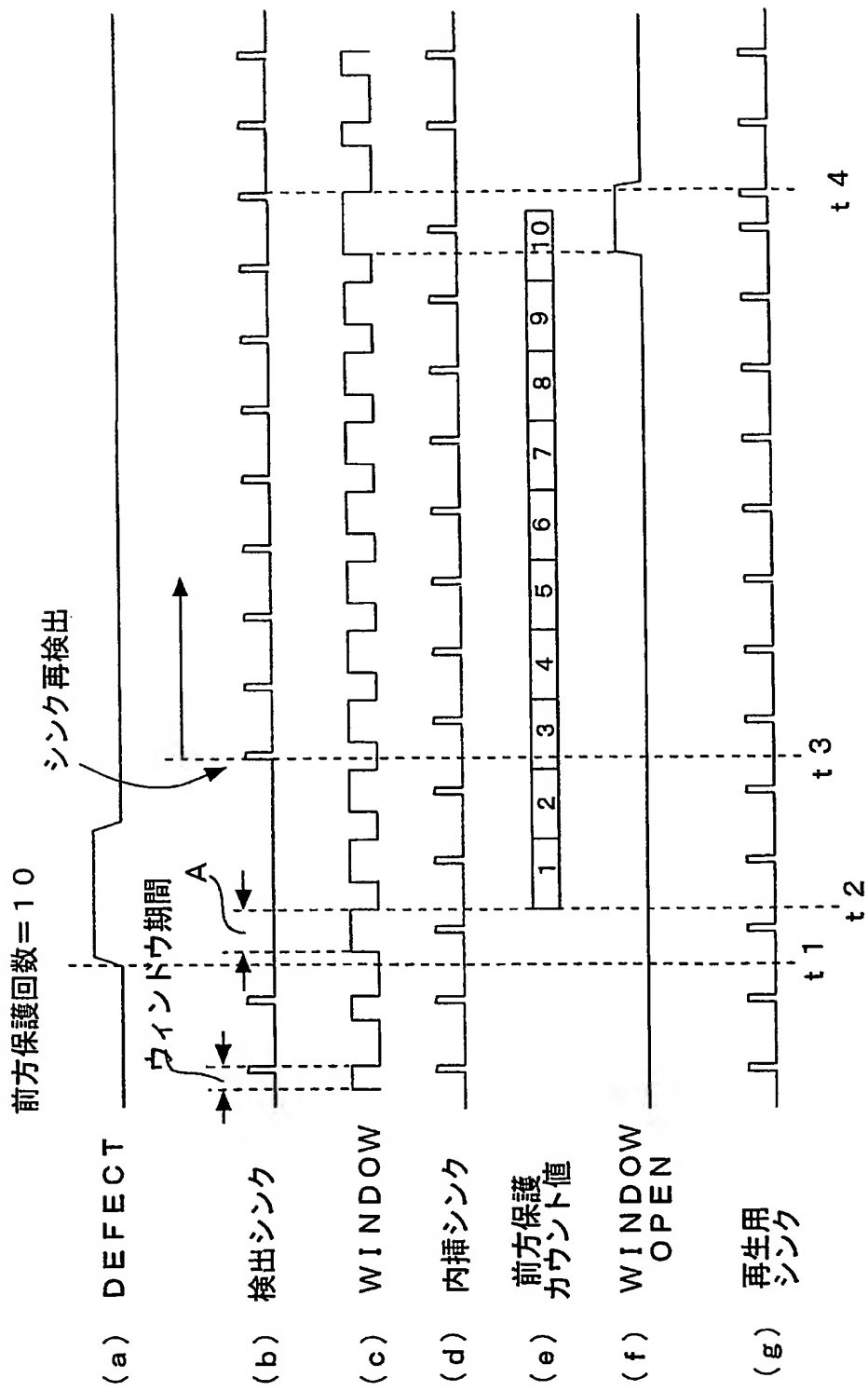
【図 4】



【図5】



【図 6】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 デフェクト状態解消後等における入力信号の読み取りパフォーマンスの向上

【解決手段】 入力信号からの同期信号が所定の検出期間内に検出されなくなり、同期信号の内挿が開始された後の所定の条件下において、上記入力信号から連続して検出される各同期信号が正常なタイミングで検出されているか否かについての判定を行うようにする。そして、この判定結果に応じ、入力信号から検出される同期信号と再生用同期信号との再同期動作を行うようにする。

これにより、同期信号が内挿されることによって本来期待されたタイミングとは異なった同期信号が使用されている状態を直ちに解消できるようになる。

【選択図】 図 4

認 定 ・ 付 加 情 報

特許出願の番号	特願 2 0 0 2 - 2 1 0 6 5 8
受付番号	5 0 2 0 1 0 6 1 2 3 2
書類名	特許願
担当官	第七担当上席 0 0 9 6
作成日	平成 1 4 年 7 月 2 5 日

< 認定情報・付加情報 >

【特許出願人】

【識別番号】	000002185
【住所又は居所】	東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号
【氏名又は名称】	ソニー株式会社

【代理人】

申請人	
【識別番号】	100086841
【住所又は居所】	東京都中央区新川 1 丁目 2 7 番 8 号 新川大原ビ ル 6 階
【氏名又は名称】	脇 篤夫

【代理人】

申請人	
【識別番号】	100114122
【住所又は居所】	東京都中央区新川 1 丁目 2 7 番 8 号 新川大原ビ ル 6 階 脇特許事務所
【氏名又は名称】	鈴木 伸夫

次頁無

特願 2002-210658

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[000002185]

1. 変更年月日

1990年 8月30日

[変更理由]

新規登録

住 所

東京都品川区北品川6丁目7番35号

氏 名

ソニー株式会社